

《書評》

Maarten Van Ginderachter and John Fox (eds.)
National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe

中辻 柚珠

近年ナショナリズム史研究は、その目的や方法論において重要な転期を迎えている。1980年代以降のゲルナー、アンダーソン、ホブズボームらに代表される、近代化によるネイション構築主義的理解は既に批判されて久しい。また、彼らの議論を創出せしめた近代的価値への失望は、同時に当時の社会の多様な側面への関心も引き起こした。しかし、それはしばしば「大きな物語」の批判のために例外的な出来事や人々を取り上げ、過大に評価するという、行き過ぎた修正主義を引き起こす可能性を孕んでもきた。

こうした状況に重要な変化をもたらしたのが、アメリカ在住のチェコ史家 Tara Zahra が提示したナショナル・インディファレンス研究である。彼女は、自らの師であるハプスブルク史家の Pieter M. Judson の見解に重要な示唆を得、ナショナルなものに対する無関心な態度は決して前近代の遺物ではなく、それ自体近代化の産物であることを主張した。彼女が言う大衆の「無関心」とは、近代大衆政治の中でナショナリストらが大衆の中に見出した否定的構築物である。すなわち、ネイションという共同体を利害単位とし、その構成員たる大衆を政治に巻き込まんとするナショナリストに大衆が迎合しないとき、そうした大衆の態度はナショナリストらによって「無関心」と位置づけられる。いわば、無関心は「想像の非共同体 (imagined noncommunities)」であり、そのようにひとたび想像されることで、ナショナリズム過激化の推進力となったのである¹。

ナショナル・インディファレンス研究はいまだ日本での紹介が乏しいが、欧米の研究者らの間では既に強い支持があり、そうした支持の上に、多くの建設的批判がここ約 10 年の内に活発に繰り広げられている。そして本年、従来のナショナル・インディファレンス研究の課題を踏まえつつ、その利点を最大限活かすことを目指した論文集が出版された。それが、今回紹介する *National Indifference and the History of Nationalism in Modern Europe* である。本書は、ナショナリズム史を専門とする欧米の若手・中堅研究者らの 11 の個別研究から成る。多様な個々の研究の関心を貫くのは、ナショナル・インディファレンス（ナショナルなものへの無関心）の歴史的重要性への問いである。

本書の構成は次の通りである。

M. V. Ginderachter and J. Fox, “Introduction: national indifference and the history of nationalism in modern Europe”

¹ Tara Zahra, *Kidnapped Souls: National Indifference and the Battle for Children in the Bohemian Lands, 1900-1948*, Cornell University Press, 2008; Id., “Imagined Noncommunities: National Indifference as a Category of Analysis”, *Slavic Review*, 60-1, 2010, pp.93-119; Pieter M. Judson, *Guardians of the Nation*, Cambridge, 2006.

1. T. Verschaffel, “Too much on their minds: impediments and limitations of the national cultural project in nineteenth-century Belgium”
2. S. A. Bellezza, “From national indifference to national commitment and back: the case of the Trentine POWs in Russia during the First World War”
3. M. Bresciani, “Lost in transition? The Habsburg legacy, state- and nation- building and the new fascist order in the Upper Adriatic”
4. Z. Doleshal, “National indifference and the transnational corporation: the paradigm of the Bat’a Company”
5. F. Erdeljac, “Between nationalism and indifference: the gradual elimination of indifference in interwar Yugoslavia”
6. A. Carrol, “Paths to Frenchness: national indifference and the return of Alsace to France, 1919-1939”
7. G. Egry, “Beyond politics: national indifference as everyday ethnicity”
8. M. Labbé, “National indifference, statistics and the constructivist paradigm: the case of the Tutejsi (‘the people from here’) in interwar Polish census”
9. B. Karch, “Instrumental nationalism in Upper Silesia”
10. J. Bjork, “ ‘I have removed the boundaries of nations’ : nation switching and the Roman Catholic church during and after the Second World War”
11. A. Whittington, “ ‘Citizen of Soviet Union - it sounds dignified.’ Letter writing, nationalities policy, and identity in the post-Stalinist Soviet Union”
12. J. Fox, M. V. Ginderachter, and J. M. Brophy, “Conclusion: national indifference and the history of nationalism in modern Europe”

導入部では、まず既存のナショナル・インディファレンス研究の功績について述べられる。Jeremy King、Pieter M. Judson、Tara Zahra および James Bjork らに代表される 2000 年代のナショナル・インディファレンス研究は、みな対象を中東欧に限定してきた。しかし、著者によると、これらの研究にはナショナリズム研究全体を再活性化させるような二つの潜在的価値が秘められている。一つは、従来のナショナリズム史研究に見られる、ネイションの形成を必然のものとみなす目的論的見方の反省を促し、ナショナリズムの広範性や一貫性、そしてナショナリストが自称する成功に留保を付す視角を提供したことである。もう一つは、ナショナリストの議論のみを辿る構築主義的パラダイムに対し、実証的で、大衆の層にまで視野を広げた社会的アプローチを取ることを促した点である。本書は、こうした既存の利点を踏まえつつも、ナショナル・インディファレンス研究を①地理的②時代的③概念的視座から刷新することに挑戦し、本書を「ナショナル・インディファレンス 2.0」と位置づけようと試みている。

第 1 章は、19 世紀ベルギーにおけるナショナリズムと芸術家の関係をナショナル・イン

ディファレンスの観点から考察したものである。ナショナルな文化事業を推進する存在として期待された芸術家らが、いかにナショナルな事柄に対し僅かな関心しか払っていなかったかを、ベルギーという国家の多言語的状況や芸術の商業的利害といった観点から論じている。

第2章は、第一次世界大戦以前までオーストリア帝国に属し、リソルジメントに傾倒していない住民が大多数であったトレントの人々が、ロシアの捕虜となった経験を通じていかにナショナルな帰属意識を植え込まれ、同時にナショナル・インディファレンスが根絶されていったかを考察したものである。

続く第3章も、旧オーストリア帝国領の地域を舞台にイタリア・ナショナリズム（次いでファシズム）について論じたものである。対象となるイストリア地方の帝国時代の遺産に焦点が当てられ、民族的浄化より政治的浄化を優先するイストリア独自のファシズム形態が歴史的な多文化共生の文脈で生じたナショナリズムへの無関心に由来するものであることを指摘している。

第4章は、世界的に大きく活動を展開し、現在も国際的によく知られているモラヴィアの都市グリーン発の製靴会社「バチャ（Bat'a）」のコスモポリタニズムに結び付く企業理念が、いかにナショナリズムと対立したかを論じたものである。バチャの役員らは、会社の利益追求を最大の目的とし、ナショナリストから激しい攻撃を受ける中でもナショナリズムに対し日和見的に振舞うことを社員に推奨しながら、ナショナリズムへの無関心を自覚的に制度化していった。

第5章は、地方当局の監視資料の記述を基に、戦間期ユーゴスラヴィアにおける一般大衆がいかにナショナルな政策に無関心で、またときに反発すらしてきたかを明らかにしている。また、困窮した状況に由来する、本来はナショナルな文脈とは関係のない大衆の不満の政治的表出を、ナショナリストがいかにナショナリズムの文脈に引き込み、ナショナル・インディファレンスを消失させていったかについても考察している。

第6章は、戦間期フランスのアルザスをナショナル・インディファレンスの観点から考察することで、中央のフランス政府の見解のみに依拠しては捉えきれない地方の実情を明らかにしようとしている。アルザス住民が話すドイツ語方言をフランス語に取って替えることで、彼らをフランス人にしようと考えていた政府とは異なり、アルザスの人々は、フランス語の導入自体は歓迎しつつも、二言語併用とフランス人であることを両立させようとしていた。ここに、フランス性に対する両者の見解の相違が明らかとなっている。

第7章は、Rogers Brubaker 的エスニシティ理解、すなわちエスニシティを当事者の認知カテゴリーとする考えに依拠しながら、エスニシティの認知が状況によって変化する側面に着目し、ナショナリズムと二項対立のものとして描かれるナショナル・インディファレンスに替わって、「日常的エスニシティ（everyday ethnicity）」という概念を提示している²。

² 但し、ナショナル・インディファレンスが本当にナショナリズムと二項対立のものであるかについては検討の必要がある。本論文集終章の著者も、その認識に対する批判を行っている（252頁）。

これを著者の専門であるルーマニアの事例に当てはめながら、エスニシティを表明する人々の主体性およびそうした表明の相互作用からナショナリズムの展開を分析している。

第 8 章は、戦間期ポーランドの国勢調査における「この人 (tutejsi)」というナショナル・インディファレンス側の人々の現実をナショナリストがいかに認識していたか、またそれにより現実の国勢調査がいかに形作られていったかを、ナショナル・インディファレンス側の構築過程を辿るという立場から分析している。

続く第 9 章も、上シレジアの事例を考察している。著者は Max Weber の価値合理的行為と目的合理的行為の議論を独自に転用し、ナショナリズムを、ネイションの絶対的価値への信奉から生じるものと、別な利害のために道具として活用されるもの（著者はこれを「道具的ナショナリズム (instrumental nationalism)」と称している）の二つに分類している。この概念の適用によって、上シレジアの住民らがナショナリズムに対し、いかに主体的に振舞ったかを明らかにしようとしている。

第 10 章は、第二次世界大戦後の上シレジアにおける聖職者のネイションに関する言説を考察したものである。著者は、言語的多様性を神からの罰と考えるカトリシズムと、言語により区切られたネイションの価値を信奉するナショナリズムの二つの主義の間における、両立しえない本質的矛盾に着目し、上シレジアの住民らにナショナル・インディファレンスの切り替えを容認した聖職者らの態度を、ネイションの価値は認めるが特定のネイションに固執しない「限定的無関心主義 (restricted indifferentism)」と位置づけている。

本書最後のモノグラフにあたる第 11 章では、1960 年代および 70 年代のソ連におけるエスニシティ登録をめぐる一般大衆の主張に焦点が当てられ、市民としての、いわばソヴィエト的なアイデンティティの主張が、ネイションに依拠した国家の政策、いわばネイションへの非無関心に応答して表出してきたものであったことが論じられている。

最終章では、全論文を振り返り、導入部で主張されたナショナル・インディファレンス研究の①地理的②時代的③概念的再検討がいかに各章で為されたかが述べられる。著者によれば、ナショナル・インディファレンス研究の多くが対象を中欧に集中させてきた状況は、歴史認識における東西二分論の再生産に繋がる。第 1 章および第 6 章の個別研究は、この問題点に答えるものであった。また、ナショナル・インディファレンス研究を近代のみでなく現代にも積極的に適用させることで、旧来のナショナリズム史研究の、ナショナリズム出現の要因を近代化のみに求める近代主義的考えにも挑戦した。従来のナショナル・インディファレンス研究の最たる課題と見なされてきた概念の問題については、第 7 章、第 9 章、第 10 章で具体的な改善案ないし代替案をもって再検討された。これらの章が提起する課題を踏まえつつ、終章の著者は、ナショナル・インディファレンスを「人々が行うこととしてのナショナル・インディファレンス」と「人々が行わないこととしてのナショナル・インディファレンス」の二種に分解可能だろうと述べる (252 頁)。前者はすなわち意志を伴う姿勢・主張・方針として理解されるものである。対して、後者が指し示す

のは、ネイションというものへの意識が欠如した状態である。これは、ナショナリズムという運動への無関心というよりは、ネイションそのものへの無関心として理解できる。重要であるのは、そうした姿勢もまた前近代特有のものではないという点であろう。著者は Michael Billig の議論を援用しつつ、ナショナリズムが平凡化した近代以降の社会においても、こうした無関心は生じると指摘する。最後に、ナショナリズムが偶発的な出来事であることを強く指摘し、そこに絡み合うナショナル・インディファレンスの検討からナショナリストの議論の中心性を定直し直すことの必要性を主張して、本論文集は閉じられる。

本書は、ナショナリズム史研究に画期をもたらしたナショナル・インディファレンス研究の利点を最大限活かしながら、そのヴァージョン・アップを図った野心の一冊である。本書が指摘する旧来のナショナル・インディファレンス研究の概念上の問題は、今後この分析概念に依拠しようとする者ならば決して無視しえないものである。すなわち、「ナショナル・インディファレンスは根本的に受動的な、ナショナリストのカテゴリーである」³とする Zahra の見方は、もはやナショナル・インディファレンスを語る上では限定的な定義と言わざるを得ない。これは、彼女が主張する「想像の非共同体」としてのナショナル・インディファレンス理解に真っ向から見直しを求めるものであると言えよう。

本書に収められた論文の殆どが、こうした観点の下、ナショナルなものに無関心とされた人々の主体性に強い関心を寄せている。とりわけ、第 4 章や第 11 章は、自らの無関心が極めて自覚的に記されたものを一次史料としており、ナショナル・インディファレンスはナショナリストの史料の中にしか見いだせないとする旧来の見方に潜んだ課題を建設的に克服している。

しかし、本書には再検討すべき課題も残されている。評者が思うに、本書は、ナショナル・インディファレンスに着目することがナショナリズム史全体を理解することにどれほど影響を与えるかという視角を大幅に欠いている。本書の殆どの論文において、ナショナル・インディファレンスはナショナリズムの副産物に留まっている。ナショナリストの言説に偏ったナショナリズム史理解を修正するために別の側面を見ることは、確かに有意義であるし、必要なことである。しかし、ナショナル・インディファレンス研究はその最初期より、ナショナルなものへの無関心の、政治的変化と過激化をもたらす潜在能力に着目していた⁴。言い換えれば、ナショナリズムという政治運動はナショナル・インディファレンスの存在抜きには理解できない。評者自身、ナショナル・インディファレンスに着目する最大の意義はこの点にあると考える。この視角を欠いたまま、ナショナル・インディファレンス研究をヴァージョン 2.0 にアップデートすることは妥当なのであろうか。今一度 Zahra の議論に立ち返り、その本質的意義を再検討する必要があるだろう。但し、第 3 章のイストリアにおけるファシズムの形成に関する議論に限っては、ナショナリズムへの無関

³ Zahra, “Imagined Noncommunities”, p.105.

⁴ Ibid, pp.97-98.

心な態度がいかに政治のあり方を規定したかについて見事に論じ切っていたので、高く評価したい。

以上、評者が考える本書の意義と課題について述べてきた。ナショナル・インディファレンス研究の視角は、今後のナショナリズム史研究の上で重要な地位を占めていくであろう。本書は、ナショナルなものへの無関心と呼びうる事象のあらゆる形態を対象としながら、ナショナル・インディファレンス研究の可能性を最大限広く見積もり、研究の今後のさらなる活性化に多大に貢献している。今後日本の読者の間でもナショナル・インディファレンスに関する論文・研究書が広く読まれていくことを期待したい。

(23.4×15.6 cm, pp. xi + 262, February 2019, Routledge, £105.00)

(京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC)